

は、より多くの一般信徒を「シャリーアの言説」に引き込むことで、一般信徒に対するウラマーの権威を回復し、ウラマーが欧米において新たな支持層を獲得するための有効なツールとして機能する可能性を秘めている。

少数派フィクフは、現代イスラーム思想、宗教間対話、アイデンティティ・ポリティクス等、様々な問題系と直接的連関を有する概念であり、今後の研究の深化が期待される。

「俗人」説教師の活躍と

イスラムにおける権威の問題

八木久美子

本発表では、「イスラム版テレビアンジェリスト」とも呼ばれ、近年注目を集めている新しいタイプの説教師について論じる。彼らは西洋的な文化や生活様式に親しんでいる富裕層から支持を受けており、この事実が、イスラム復興を経済的不安や社会的な剝奪感によって説明しようという試みを無効にする。

ただここで注目したいのは、こうした新しい説教師たちが、ウラマーとは認知されていないにもかかわらず、説教師として成功していることが提起する権威の問題である。本発表では、このタイプの説教師として圧倒的な知名度を誇るアムル・ハーレド（一九六七）を中心にエジプトを例にして論を進める。

ハーレドはいつも高価なスーツを身にまとい、衛星放送やイ

ンターネットといった新しいメディアを使いこなし、流暢な英語を話す。それどころか彼には宗教についての本格的な教育を受けた経歴がなく、広くウラマーと認知される可能性はまったくと言っていいほどない。彼の後継者とも言えるムイツズ・マズード（一九七八）はさらにその上を行き、教育背景も生活スタイルもまさに、アメリカ文化の申し子である。

ハーレドが訴えるのは、「イスラム共同体の再生であり、その方法を「信仰による成長」と呼ぶ。一人ひとりの信仰心に基づく行動が社会全体を成長させるという主張であり、そこには政治化に向かう可能性はない。組織化も目指されない。また彼が語るイスラムとは、法でも儀礼でもなく、信仰であり、さらには道徳だという点も重要である。

こうした説教師たちに特徴的なのは、聴衆を語りの場に引き込もうとする姿勢である。ウェブサイトにはフォーラムが用意されている。ごく身近な問題についてコランやハディースを引きながら議論して見せる。こうして彼らは、人々にイスラムについて考え語るレファレンス・ポイントを提供するのである。権威ある解釈を提供するのではない。

ウラマーとの関係に関していうと、彼らは意識的に差別化を行い、ハーレドは自ら、自分はウラマーではないと明言する。重要なのは、現代のエジプトでは、宗教省から任命されて特定の職に就くなど、国家権力との近接性がウラマーたる基準のひとつと見られているという点である。それは言い換えると、ウラマーの人々の日常からの乖離である。

歴史を振り返ると、公権力のそばにいたウラマーと一般信徒

第11部会

の間に距離がなかったわけではないが、そうしたウラマーと一般信徒の関係は、ひとつの連続体の両極という関係にあった。両者の間には地域共同体に密着した仲介者の役割を果たす者がいたのだ。そして今、新しい説教師の果たしているのはこの役割である。ハーレドたちは、新しいメディアをおして情報を自由に取捨選択し、ネット上で自らの意見を表明するといった行動が当たり前になっていく人々のために、そうした行動様式の延長線上にイスラムを据え、日々の生活とイスラムについて考え語るといふ行為をつないでみせる。

十九世紀末からの近代化政策は社会におけるウラマーの居場所を徐々に縮小してきた。子供の教育の担い手、地域共同体の精神的支柱という側面は後退し、イスラム諸学、とりわけイスラム法学の専門家と認識されるようになった。しかしこれをエジプト社会の「世俗化」と見るべきではない。なぜならイスラムが社会から後退することはなく、ウラマーの退場によってできた隙間は、一般の信徒によって埋められていったからである。新しい説教師たちは、こうしてウラマーが不在になっていった空間に、新しい形でイスラムをふたたび埋め込み、その意味でエジプト社会の再イスラム化を完成させたとも見ることができ

ジュナイド神秘主義におけるファナー論

澤井 真

初期スーフィズムの代表的スーフィーの一人であるジュナイド (al-Junayd, d.910) は、神的合一(タウヒード)を論じる過程において、ファナー (Fanā) の語とその対概念であるバカー (Baqā) の語を中心に彼の神秘主義論を展開した。スーフィーのさまざまなテクニカル・タームと同様に、これらの語も共にクルアーンに由来しており、ファナーの語は「消滅」を、バカーの語は「存続」を意味している。

クルアーンにおいて「原初の契約」(mithaq)として知られている一節(第七章一七二節)は、ジュナイドが神的合一を論じるうえで重要な役割を果たしている。この句は、創造以前にあって神がアダムの腰から子孫を取り出して、神が主であることを証言させたという内容である。「原初の契約」とは、この出来事に依拠している。

この「原初の契約」との関わりにおいて、彼は自らのファナー論を展開させた。すなわち、神は創造以前という始まりのない永遠性が消滅するとき人間の前に顕現する。このとき、人間は未だ現世的存在を有しておらず、人間は肉体としての存在でもなく、また非存在でもない中間的性格を有する者である。この状態において人間は現世的な在り方から消滅(ファナー)しているため、人間は消滅の状態において消滅し、存続の状態